様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２２０９

研究課題名（和文）江戸後期における陽明学文献の研究 ―佐藤一斎と大塩中斎を中心に―

研究課題名（英文）A study of the Youmeigaku literature in the late Edo period - with a focus on Sato Issai and Oshio Chusai.

研究代表者
永冨　青地（Nagatomi, Seiji）

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：５０３２９１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究においては、佐藤一斎および大塩中斎が、王守仁（王陽明）の著作について、近代的なテキスト・クリティークの手法を駆使してそれを解明していった様を明らかにし、あわせて二人が長崎から流入する唐本を利用しつつ、版本校正を進めていった様を描き出した。
　これらの観点は、本研究による諸論文の発表後、多くの陽明学・日本思想研究者より賛同を得ることができた。また、本論文においては、佐藤一斎による「挿注」が、単なる注釈にとどまらず、従来の訓点から、近代的な翻訳へとつながる可能性を有する、画期的なものであったことを明らかにした。この観点は、特に江戸期における訓点の研究者から賛同を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本においては、江戸末期に至るまで、中国の学問を輸入し、それを理解することが学問の主流であった。しかしながら、江戸期の日本の陽明学者が、いかに中国の陽明学を分析したかということは、基本的な問題でありながらも従来軽視されてきた。本研究においては、江戸後期における最大の陽明学者である佐藤一斎及び大塩中斎を主題として、彼ら二人が長崎から流入する唐本を通して、王陽明の思想を如何にして分析していったかを見ることにより、日本における外来思想の受容の意義を探ってみた。また、従来、江戸期の漢文の読法としては訓点のみが注目されてきたが、近代的な翻訳へと繋がる可能性を有する、挿注という読法を学界に紹介した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have clarified how Sato Issai and Oshio Chusai used modern methods of textual criticism to elucidate the works of Wang Shouren (Wang Yangming), and how they also used the Chinese books coming from Nagasaki to proofread the editions.
These perspectives have been supported by many scholars of Yangming and Japanese thought since the publication of the papers in this study. In this thesis, it was also made clear that the 'insertions' by Sato Issai were not merely annotations, but epoch-making works that had the potential to lead to modern translations from the traditional point of reference. This point of view was particularly supported by researchers of kunten in the Edo period.

研究分野：東アジア近世思想史

キーワード：佐藤一斎　大塩中斎　大学古本傍釈　大学古本序　挿注　古本大学刮目

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)

王守仁の著作は、その生前より、王守仁自身の記した真筆も含めて日本に多数が渡来してきた。特に江戸期において陽明学が日本の思想界に大きな波紋を投げかけたことはすでに知られている。また、思想界以外にも、陽明学が江戸文化全体に対して大きな影響力を有していたことは、近年において中野三敏氏が強く主張している。

しかしながら、江戸期において流入した陽明学の原資料と、その影響の具体相に関しては、個別の研究はあるものの、包括的な研究に乏しかった。筆者はすでに、江戸期を中心とする日本の陽明学研究に関する概観である「日本的王守仁文献研究概観」(『文献』3 号、北京図書館出版社、pp.177-183、2006 年 7 月)、「日本における陽明学研究の回顧－江戸期より二十世紀まで－」(『日中学術交流的現状和展望』、清華大学日本研究中心、pp.108-119、2015 年 10 月）を発表し、一方で佐藤一斎に関する専論である、「佐藤一斎と『伝習録欄外書』－江戸期における陽明学の研究」(『儒教　その可能性』、早稲田大学出版部、pp.121-167、2011 年 12 月）において、東京都立中央図書館に所蔵されている佐藤一斎自筆の資料に基づき、一斎が中国より流入した資料を活用しつつ、王守仁文献に対するその精緻な分析を進化させていく様を、具体的かつ体系的に記してきた。

(2)

筆者はまた、平成 25 年から 28 年にかけて、「日本における陽明学資料の流入及びその影響について」の題目によって科研費基盤研究（C）をいただくことができ、その成果として、従来、思想的には朱子学よりであったとされることの多い一斎が、思想的にも陽明学を強く支持していたことを発見し、「佐藤一斎は朱子学者か－『欄外書』の記載より見たる－」(『東亜朱子学国際学術検討会－日韓朱子学的伝承与創新』、復旦大学哲学学院、pp. 381-390、2015 年 12 月）においてそのことを明らかにしてきた。本研究においては、永冨が以上の研究において示したような、文献調査に基づく具体的な分析によって、江戸期における陽明学文献の流入が、特に江戸期後期において、思想家たちに対してどのような影響を与えたのかを体系的に論述していくことを目指した。

２．研究の目的

(1)

従来、江戸期を中心とする、日本における陽明学資料の流入に関して、包括的な研究がなされなかったことの代償として、中国より流入した原資料、そしてその刺激によって執筆された、日本の学者による陽明学関係の文献の包括的な目録が作成されたことはなかった。筆者はすでに、「王守仁著作目録」および「王守仁著作和刻本序跋」（ともに永冨青地『王守仁著作の文献学的研究』附録、汲古書院、2007）においてそのための基礎作業に着手しているが、本研究期間中においては、より精密かつ包括的な目録を作成し、陽明学の原資料の日本への流入が、いかに江戸の思想界を活発化させたのかを明らかにしていく。また、そのように流入した原資料の中には、中国において散逸したものも多い。そのような散逸資料の翻刻

による学界への紹介を、筆者はすでに「『鄒守益集』未収詩輯佚」（一）～（三）（『人文社会科学研究』54～56 号、人文社会科学研究会、2014 年～2016 年）において行い、中国本国において編纂される『鄒守益集』の編者は、その増訂版における収録を、筆者に要請してきた。このように、この種の翻刻作業は、海外の学界を益することが多いため、本研究期間中も鋭意進めていく。

(2)

筆者による陽明学に関する文献学的研究の専著である、『王守仁著作の文献学的研究』（汲古書院、2007 年 2 月）は、付録の目録類を含め、この分野の基本的な業績として、特に中国本国において高い評価を得てきた。本研究は、そのような文献学的研究に基づく、全面的な分析を、日本国内に収蔵される陽明学関係資料、そしてそれによって刺激を受け作成された、日本における陽明学関係の悉皆目録の作成を目指すものである。その過程において発見された新資料の紹介、翻刻などは、上述のごとくすでにその一部を公開しているが、本研究期間中に公刊されることがすでに決定している、『陽明影印叢書』において、その成果を全面的に世界の学界に対して公開することが可能となる。このことは、江戸期において日本に流入した陽明学関係の原資料の価値はもちろん、それを分析した、江戸期の日本人学者による研究成果をも、世界に知らしめることを可能とするものなのである。

３．研究の方法

(1)

本研究は、江戸後期を中心とする、日本における陽明学資料の流入の具体相とその影響の具体的な過程を解明し、日本における陽明学の受容史を文献考察の角度から明らかにするものである。方法としては、日本国内の公私収蔵機関に所蔵されている王守仁の書跡、中国版および日本の和刻本や日本人による注釈書・解説書などの文献資料に関する網羅的な悉皆調査を行い、基礎的な文献に対する着実な研究に基づき、江戸期における陽明学の受容の具体相を明らかにするものである。

(2)

本研究においては、各種の収蔵機関に所蔵されている、王陽明の書跡の網羅的な調査を行う。その過程において、デジタル化の作業も進める。また、そのような書跡の多くには、日本人によって記された題識跋語や収蔵印などが付されている。そのため、その由来などについても記録・考察を行う必要がある。

次に、江戸期において、中国から流入した陽明学関係の文献について、長崎からの輸入の際の記録、さまざまなコレクションの蔵書目録、そしてそれら陽明学関係文献を閲覧、記録した人々の文集・随筆などを通して精査していくこととする。次に、それらの中国刊本（いわゆる唐本）に基づいて出版された和刻本や、儒学者・文学者たちによる読書札記などの分析により、陽明学関係の和刻本の具体的な出版状況を調査し、江戸後期における、陽明学関係の文献の受容の様子を究明する。

そして、これらの中国刊本および和刻本によって、陽明学理解を深めていった江戸期の儒者たちが作成した、陽明学の教義を読書人に対してアピールするための、概説書類（簡明な注釈書も含む）の出版情況を考察し、併せて思想内容の分析をも行うものである。
以上の分析・調査研究を通して、江戸後期における陽明学資料の流入およびその影響についての具体的な過程を解明し、日本における陽明学の受容史を、文献調査に基づく考察の角度から明らかにする。

４．研究成果

(1)

研究代表者である永冨青地はまず、「関於上海図書館蔵『新刊陽明先生文録続編』」（『王学研究』第 6 号、pp. 405-435、2017 年 8 月 31 日）、「関於『朱子晩年定論』的単行本」（『林慶彰先生七秩華誕寿慶論文集』、万巻楼図書股份有限公司、pp. 381-394、2018 年 9 月 31 日）、「王守仁『大学古本傍釈』的日本受容――以佐藤一斎与大塩中斎為中心」（『新学衡』第 3 号、pp. 206-213、2018 年 12 月 31 日）、「佐藤一斎与朱子学的関係」（『東亜朱子学新探――中日韓朱子学的伝承与創新』、商務印書館、pp. 512-523、2020 年 11 月 31 日）などの中国語論文により、永冨の佐藤一斎と大塩中斎、さらには陽明学に関する見解の、中国の学界に対する紹介を行った。現在、中国における陽明学研究は活況を呈しており、そこでの紹介が緊急の課題であったためである。幸い、これらの諸論文は中国において一定の反響を売ることができた。

（２）

次に、本研究の前史として、江戸初期における儒家の中国観を示す論文である「明清変革と林羅山・鵞峰」（『東洋の思想と宗教』第 38 号、pp. 20-39、2021 年 3 月 25 日）を上梓した。本論文は、日本儒学と中国儒学の両方面から注目を得ることができた。また「江戸期における『聖蹟図』の出版について」（『中国―社会と文化』第 33 号、pp. 51-75、2018 年 7 月 31 日）も、江戸期において孔子がどのように描かれたのかを通史的に探り、同様に好評を得ることができた

（３）

次に、日本および中国の蔵書機関に死蔵され、全く研究されてこなかった、陽明学を中心とする資料の再評価を行った。「尊経閣文庫所蔵の明版『聖朝破邪集』について」（『汲古』第 71 号、pp. 30-35、2017 年 6 月 15 日）、「胡宗憲本『陽明先生文錄』および附錄『伝習錄』について」（『東洋の思想と宗教』第 35 号、pp. 27-44、2018 年 3 月 31 日）、「王畿『中鑑録』に関する一考察」（『陽明学』第 30 号、pp. 79-103、2020 年 3 月 31 日）、「王復礼編『三子定論』について―清代における『朱子晩年定論』の受容―」（『汲古』第 80 号、pp. 32-36、2021 年 12 月 15 日）、「思想史研究における文献学の有用性について―『朱子晩年定論』を一例として―」（『東洋の思想と宗教』第 39 号、pp. 1-18、2022 年 3 月）、「山梨県立図書館蔵『薛王二先生教言』について」（『汲古』第 82 号、pp. 25-30、2022 年 12 月）などがそれであり、学界に多くの新資料及びそれらの資料に関する新たな知見を紹介する

ことができた。

（4）

また、現代中国における最大の陽明学研究者である陳来博士の主著を、現代日本の陽明学研究の水準から見た、「陳来著『有無之境―王陽明哲学的精神』について」（『環日本海研究年報』第 26 号、pp. 59-68、2021 年 3 月 31 日）は重要な研究書に対する書評として好評を博し、中国語訳も刊行された。

（5）

本課題において特に重要な論文として、研究代表者である永冨青地は、研究論文「佐藤一斎は朱子学者か―『欄外書』の記載より見たる」(『土田健次郎教授退職記念論集』、汲古書院、pp. 279-295、2020 年 2 月)を発表した。同論文は、従来、朱子学者、あるいは朱王折衷の学者として分類されることの多かった佐藤一斎について、彼の思想に関する一次資料である東京都立図書館河田文庫所蔵の自筆写本によって、彼の思想が明らかに陽明学よりのものであることを証明したものである。

同論文については、従来の刊本のみによる研究とはことなり、その思想をもっとも端的に表しうる写本によって結論を導き出した、実証的研究として、日本国内の儒学研究者のみならず、中国・台湾を中心とする海外の儒教研究者からも、日本儒学の多様性を示す論文として、高い評価を得ることができた。

特に、本論文によって、佐藤一斎の陽明学研究の水準の高さが中国の学会に紹介されたことによって、佐藤一斎の著作の影印本を、永富が編集を行う、中国・鳳凰出版社の、王陽明著作の影印叢書に収録することが決定された。

これは日本陽明学の水準の高さを広く国外に知らせる契機となりうるものであり、永富の本論文が、国際的な日本陽明学研究に具体的に寄与したことを証明しうるものである。

さらに、上記の論文が機縁となり、永富は、中国社会科学出版社より刊行予定の『王陽明大辞典』において、日本陽明学の部分を担当することを要請された。同辞典は、中国における陽明学の現在の研究水準を代表するものであり、そこにおいても、佐藤一斎を代表とする、日本陽明学を紹介することが可能となったのである。これは日本陽明学を中国の第一線の研究者に紹介する上での好機であり、研究史の上で、一定の意義を有するものと考える次第である。

（6）

最終年度である本年においては、本研究の総括として、「佐藤一斎および大塩中斎による王守仁『大学古本傍釈』の受容―併せて佐藤一斎による「大学古本序」挿注を論ず―」(『東洋の思想と宗教』第 40 号、pp. 39-55、2023 年 3 月)を上梓した。本論文においては、佐藤一斎および大塩中斎が、本場中国においてすら、王守仁の真作か否かについて議論があった『大学古本傍釈』について、近代的なテキスト・クリティークの手法を駆使してそれが王守仁の真作であることを解明した様を明らかにし、あわせて二人が長崎から流入する唐本を利用しつつ、版本校正を進めていった様を描き出した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 永冨青地	４．巻 80
２．論文標題 王復礼編『三子定論』について―清代における『朱子晩年定論』の受容―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 汲古	６．最初と最後の頁 32-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 永冨青地	４．巻 9
２．論文標題 評陳来著『有無之境―王陽明哲学的精神』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代儒学	６．最初と最後の頁 249-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 永冨青地	４．巻 27
２．論文標題 語られざる陽明学者―安岡正篤について―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 環日本海研究年報	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 永冨青地	４．巻 1
２．論文標題 佐藤一斎与朱子学的関係	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東亜朱子学新探;中日韓朱子学的伝承与創新	６．最初と最後の頁 512‐523
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 明清変革と林羅山・鵞峰	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『東洋の思想と宗教』38号	6．最初と最後の頁 20-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 陳来著「有無之境―王陽明哲学的精神」について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『環日本海研究年報』26号	6．最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 佐藤一斎は朱子学者か―『欄外書』の記載より見たる	5．発行年 2020年
3．雑誌名 土田健次郎教授退職記念論集、汲古書院	6．最初と最後の頁 pp. 279-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 30
2．論文標題 王畿『中鑑録』に関する一考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『陽明学』30号、二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究センター	6．最初と最後の頁 pp. 79-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 佐藤一斎与朱子学的関係	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『東亜朱子学新探　中日韓朱子学的伝承与創新』、商務印書館	6．最初と最後の頁 pp。512‐523
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 王守仁『大学古本傍釈』的日本受容　以佐藤一斎与大塩中斎為中心	5．発行年 2018年
3．雑誌名 第三回「南京論壇」国際フォーラム「理解与対話　構建亜太命運共同体　亜太歴史・現状与未来」論文集	6．最初と最後の頁 153-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 関於『破邪集』在中日両国刊印及其背景的考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 「明清中西文化交流与基督教中国化」国際学術研討会会議論文集	6．最初と最後の頁 181-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 中日両国における『破邪集』の刊刻について	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『国際学術会議「交友与実義：天主教文献与東西文化交流史」論文集』	6．最初と最後の頁 176-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 中日両国の『破邪集』刊行と背景の考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『国際学術会議「交友与実義：天主教文献与東西文化交流史」論文集』	6．最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 1
2．論文標題 関於白鹿洞書院明代的出版状況―以白鹿洞本『伝習録』為例―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 張軾朱熹与儒家会講伝統ー紀念朱張会講850周年国際学術研討会論文集	6．最初と最後の頁 306-311
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永冨青地	4．巻 35
2．論文標題 胡宗憲本『陽明先生文録』および附録『伝習録』について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東洋の思想と宗教	6．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 永冨青地
2．発表標題 王守仁《大学古本傍釈》的日本受容 ：以佐藤一斎与大塩中斎為中心
3．学会等名 京都大学人文科学研究所研究班「清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 永冨青地
２．発表標題 王畿『中鑑録』之考察
３．学会等名 第四回「陽明学与浙江文化」東亜視野中的陽明学、浙江工商大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 永冨青地
２．発表標題 王守仁『大学古本傍釈』在日本的接受情況　以佐藤一斎与大塩中斎為中心
３．学会等名 第二届儒家経典的跨域伝釈国際学術研討会――中心与辺縁的文化受容及伝釈（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 永冨青地
２．発表標題 反キリスト教文献集『破邪集』の出版とその影響について
３．学会等名 「比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想―王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼―」
４．発表年 2017年

１．発表者名 永冨青地
２．発表標題 江戸期における『聖蹟図』の出版について
３．学会等名 中国社会文化学会2017年度大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 永冨青地
２．発表標題 関於白鹿洞書院明代的出版状況―以白鹿洞本『伝習録』為例―
３．学会等名 張軾朱熹与儒家会講伝統ー紀念朱張会講850周年国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関